<table>
<thead>
<tr>
<th>タイトル</th>
<th>ブ・ブ・ルイパコフ『古代ロシア 説話・ブィリーナ・年代記』　ブィリーナ研究における新「歴史学派」のこころみ</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>著者(s)</td>
<td>中村喜和</td>
</tr>
<tr>
<td>引用</td>
<td>一橋論叢 52巻 6号 672-688</td>
</tr>
<tr>
<td>発行日</td>
<td>1964-12-01</td>
</tr>
<tr>
<td>タイプ</td>
<td>Departmental Bulletin Paper</td>
</tr>
<tr>
<td>テキストバージョン</td>
<td>publisher</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://doi.org/10.15057/3054">http://doi.org/10.15057/3054</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
このように資料が存在する以上に、一定の限られた時期に向けたブリーナーや共論的研究はある程度可能である。しかし、技術的な研究はそれ、つまり、ブリーナーの発生に関する研究は、さきに述べた理由によって、つねに仮説にとどまらざるを得ない。D. チェンフスキーも指摘しているように、まずブリーナーの謎めいた想定はここに由来している。

むろし、これら緯度によって、かならずもし決定的でもないのです。しかもこの地方は、地域や文化の背景を含めていたが、いまのブリーナーの研究者を考えられる民芸の芸人、ロシアンイメージのないこの地方に住まっていたピョートル市北部のパルト海道に出る時、その商業的意義を失い、代わりに過去の文化的伝統へつながった。観光地としての開発により、地域の文化的伝統が失われ、地域の経済が衰退していることが指摘されている。
書

（109）

評

別し合う二つの傾向に分かれている（四ページ）。第一はこの口承叙事詩のなかにあるまでも過去の具体的、特殊的な事実の反映を求めようとする立場である。このさいV・ミルレルらの

ジオジオの歴史学派との相違は、後者はグリューネが社会の上層階級の産物で、支配者に対する敬意から次第に民衆のあたかも普及したと考するに反して、ソヴィエトではグリューネが民衆のなかから生まれてきたと主張する点にある。自然に

グリューネ＝ミルレルの

の歴史学派との相違点である。この派に属するものとして、ルイ・ル・パスコフはD・ル・パスコフをはじめA・ミケロス、A・ロペソ

V・ミリオレル、M・ブレスキイなどの現代研究家を

ルイ・ル・パスコフのこの分類は、かなり厳しい批判にたえう

ルイ・ル・パスコフのこの分類は、かなり厳しい批判にたえう
第十二章

Cyber Orchestration

<table>
<thead>
<tr>
<th>Title</th>
<th>Page</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>某某</td>
<td>20</td>
</tr>
</tbody>
</table>
一橋論叢 第五十二巻 第六号（122）

はまさにそのような時代であった。ルイボワはこの百数十年間のなかで、とくに16世紀末のグザーミルスティフォストラチ（聖公）の治世、一六八年のキエフの暴動、十二世紀末から十二世紀初頭のグザーミル・モハフの治世の三つの時期に民族意識の高揚をみとめ、おなびトピミナーニの成立をこの時期に結びつけてはいるのである。そして著者は、十二世紀のはじめ異教のときから説話にかかった戦士たちが四境の丘をかなたにかく、戦火がロシア本土から遠のく、勇者たちをたたえる民謡の泉かかれていたという。つまり著者は、十一世紀のはじめ異教のときから説話にかかった戦士たちが四境の丘をかなたにかく、戦火がロシア本土から遠のく、勇者たちをたたえる民謡の泉かかれていたという。つまり著者は、十一世紀のはじめ異教のときから説話にかかった戦士たちが四境の丘をかなたにかく、戦火がロシア本土から遠のく、勇者たちをたたえる民謡の泉かかれていたという。つまり著者は、十一世紀のはじめ異教のときから説話にかかった戦士たちが四境の丘をかなたにかく、戦火がロシア本土から遠のく、勇者たちをたたえる民謡の泉かかれていたという。つまり著者は、十一世紀のはじめ異教のときから説話にかかった戦士たちが四境の丘をかなたにかく、戦火がロシア本土から遠のく、勇者たちをたたえる民謡の泉かかれていたという。つまり著者は、十一世紀のはじめ異教のときから説話にかかった戦士たちが四境の丘をかなたにかく、戦火がロシア本土から遠のく、勇者たちをたたえる民謡の泉かかれていたという。つまり著者は、十一世紀のはじめ異教のときから説話にかかった戦士たちが四境の丘をかなたにかく、戦火がロシア本土から遠のく、勇者たちをたたえる民謡の泉かかれていたという。つまり著者は、十一世紀のはじめ異教のときから説話にかかった戦士たちが四境の丘をかなたにかく、戦火がロシア本土から遠のく、勇者たちをたたえる民謡の泉かかれていたという。つまり著者は、十一世紀のはじめ異教のときから説話にかかった戦士たちが四境の丘をかなたにかく、戦火がロシア本土から遠のく、勇者たちをたたえる民謡の泉かかれていたという。つまり著者は、十一世紀のはじめ異教のときから説話にかかった戦士たちが四境の丘をかなたにかく、戦火がロシア本土から遠のく、勇者たちをたたえる民謡の泉かかれていたという。つまり著者は、十一世紀のはじめ異教のときから説話にかかった戦士たちが四境の丘をかなたにかく、戦火がロシア本土から遠のく、勇者たちをたたえる民謡の泉かかれていたという。つまり著者は、十一世紀のはじめ異教のときから説話にかかった戦士たちが四境の丘をかなたにかく、戦火がロシア本土から遠のく、勇者たちをたたえる民謡の泉かかれていたという。つまり著者は、十一世紀のはじめ異教のときから説話にかかった戦士たちが四境の丘をかなたにかく、戦火がロシア本土から遠のく、勇者たちをたたえる民謡の泉かかれていたという。つまり著者は、十一世紀のはじめ異教のときから説話にかかった戦士たちが四境の丘をかなたにかく、戦火がロシア本土から遠のく、勇者たちをたたえる民謡の泉かかれていたという。つまり著者は、十一世紀のはじめ異教のときから説話にかかった戦士たちが四境の丘をかなたにかく、戦火がロシア本土から遠のく、勇者たちをたたえる民謡の泉かかれていた。
<table>
<thead>
<tr>
<th>1</th>
<th>2</th>
<th>3</th>
<th>4</th>
<th>5</th>
</tr>
</thead>
</table>